

薬学部

I	研究の水準	研究 8-2
II	質の向上度	研究 8-4

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）における科学研究費助成事業や受託研究等の研究資金の総額は、約2億6,600万円から約4億4,400万円の間を推移している。
- 第2期中期目標期間における原著論文の発表数は91件から107件、国内及び国際学会での学会発表数は237件から318件の間を推移している。

以上の状況等及び薬学部の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 学術面では、特に化学系薬学、生物系薬学の細目において特徴的な研究成果がある。
- 特徴的な研究業績として、化学系薬学の「創薬リード天然物の全合成研究」、生物系薬学の「アルツハイマー病患者由来iPS細胞を用いた病態解析」の研究がある。
- 社会、経済、文化面では、特に生物系薬学の細目において特徴的な研究成果がある。
- 特徴的な研究業績として、生物系薬学の「アルツハイマー病患者由来iPS細胞を用いた病態解析」の研究があり、これにより孤発性及び家族性のどちらにも細胞内、細胞外にA β を蓄積するタイプがあることを明らかにしている。

以上の状況等及び薬学部の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、薬学部の専任教員数は43名、提出された研究業績数は9件となっている。
学術面では、提出された研究業績9件（延べ18件）について判定した結果、「SS」は1割、「S」は7割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績2件（延べ4件）について判定した結果、「S」は10割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1件の研究業績に対して2名の評価者が判定した結果の件数の総和）

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 平成 22 年度の下村脩博士ノーベル化学賞顕彰記念創薬研究教育センターの設置によってアカデミア創薬支援を実施しており、平成 24 年度に創薬研究教育拠点「感染症・放射線障害を中心とする下村脩博士ノーベル化学賞顕彰記念創薬拠点」を新たに設置し、感染症と放射線障害を中心とした創薬研究を行っている。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 化学系薬学の「創薬リード天然物の全合成研究」では、特異な構造と生物活性から創薬リードとして注目を集めている海産天然物オフィオジラクトン A と B 及びマリノマイシン A の全合成に新規なラジカルカップリング反応を適用、成功させたこと等により、平成 26 年度に日本薬学会学会賞を受賞している。

これらに加え、第 1 期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。